「聞いて楽しもう」

このコーナーでは、新版教科書の新しい試みをご紹介します。今号は、各学年に位置づけた「聞いて楽しもう」の教材を一挙ご紹介！

新しい学習指導要領では、低学年の指導内容として、民話・昔話の読み聞かせが示されています。新版教科書では、民話や昔話を聞いて楽しむ学習材「聞いて楽しもう」を六年生まで系列化して位置づけました。

滑稽な話、スリル満点な話、落語、怪談、しみじみとした民話――子どもたちが思わず聞き入ってしまうさまざまなお話を、子どもの発達段階に応じて掲載しています。

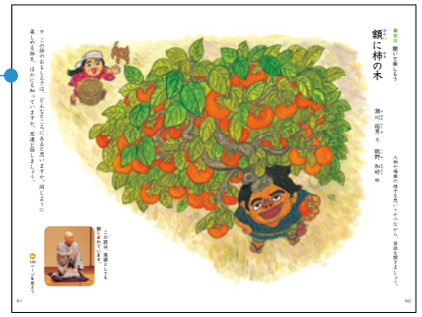
まず子どもたちが、絵を見て想像をふくらますように、見開きで挿絵を入れました。文章については巻末に配しました。最初は子どもたちに挿絵を見せながら、先生が文章を読んであげてください。その後、子どもたちが自分で文章を読んだり、誰かに読み聞かせたりしてもよいでしょう。

六年間を通して、豊かな語り文化にふれることで、言葉の力を育む素地を築いてほしいと考えています。



「まのいいりょうし」（一年下）

猟師・百一つぁんが、カモやイノシシを運よく手に入れていくという楽しい昔話。百一つぁんの情感あふれる方言も魅力的。



「額に柿の木」
（四年下）

酒飲みの三太郎の頭に柿の実が当たり、そこから柿の木が生えてくるという不思議な民話。落語「あたま山」としても親しまれている。



「三まいのおふだ」
（二年下）

和尚さんから三枚のおふだをもらって山に出かけた小僧は、やまんばにつかまってしまう。おふだを使って切り抜けようとするが…。スリリングななかにもユーモアあふれる昔話。擬声語や擬態語が多用されているのも楽しい。

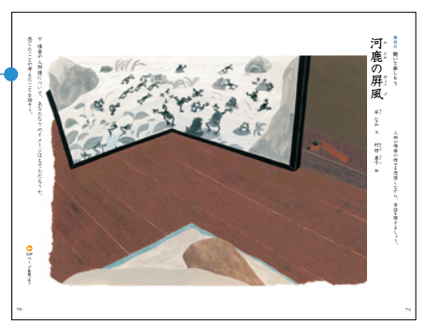


「ばけくらべ」
（三年上）

“ごんべえだぬき”と“へらこいぎつね”の化けくらべ。さあ、うまく化かせるのはどっち？たぬきときつねのやりとりが愉快な昔話。

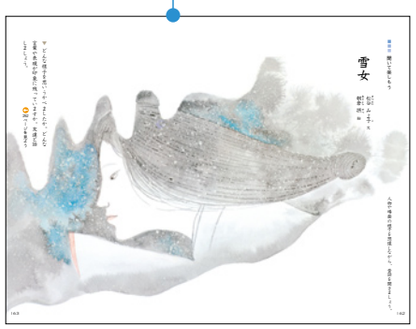
「雪女」
（五年）

吹雪の日に雪女に助けられた箕吉は、「今見たことを決して人に言ってはいけない」と言われるが…。せつなさが残る小泉八雲原作の怪談。



「河鹿の屏風」
（六年）

河鹿の住む山を売らずに守り続けた菊三郎。あるとき、菊三郎が持つ白い枕屏風に、あざやかな河鹿の絵が描かれていた…。静岡県伊豆地方に伝わる民話。



実践提案

いなばの 白うさぎ（二年上）

新しい指導を考える会



泳げないうさぎは、さめを一列に並ばせてその上を渡ろうとするが…。古くから伝わる出雲神話の一つ。



「いなばの白うさぎ」の後に掲載される「本はともだち」のページ。

「伝統的な言語文化」の授業

今回の学習指導要領では、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設され、小学校では平成二十三年から「伝統的な言語文化」を授業に取り入れることとなった。低学年では、「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」という指導事項が明記されている。ここでは二年生を例に、実際の授業を考えてみたい。

教材について

古事記を原典とするこの神話は、心優しい大国主命（おおくにぬしのみこと）の成長物語として昔から親しまれてきた。家庭や幼稚園などで読み聞かせを聞いている子どももいると考えられる。見開き二ページの挿絵は、子どもたちの興味を引きつけ、想像をふくらませるだろう。また、巻末に掲載された文章は、昔話の語り口を取り入れ、子ども自身が楽しく読み進めていける構成や表現となっている。

指導の実際

この教材では次のような授業が考えられるだろう。

第一時

①挿絵からどんな話であるかを考える。

挿絵のみが見開きで提示されているという教材の特性を生かし、挿絵から予想されることを子どもたちに考えさせる。

②読み聞かせをする。

子どもたちを教師の周りに座らせ、話を聞く姿勢を待って読み始める。大げさな声色は必要なく、子どもがゆったりと聞けるようにする。絵本ではないので、挿絵を拡大して黒板に貼ったり、「国語デジタル教科書」（※1）で拡大提示したりしてもよい。

③登場人物とその行動をグループで話し合う。

グループで話し合うことにより、一人では確かめにくい子どもが内容をつかむことができる。資料1のようなワークシートを準備してもよい。

④谷真介作の『いなばの白ウサギ』（佼成出版社）の読み聞かせを行う。

口承文芸の昔話、神話・伝承が、いろいろな人の手によって物語となることや、その違いに気づくことで、現在に引き継がれている心にふれさせたい。

絵本を見せながら読み聞かせをするときは、子どもたちを前に集め、楽な姿勢で絵が見られるように配慮する。子どもたちが教師との一体感を感じてくれる。

第二時

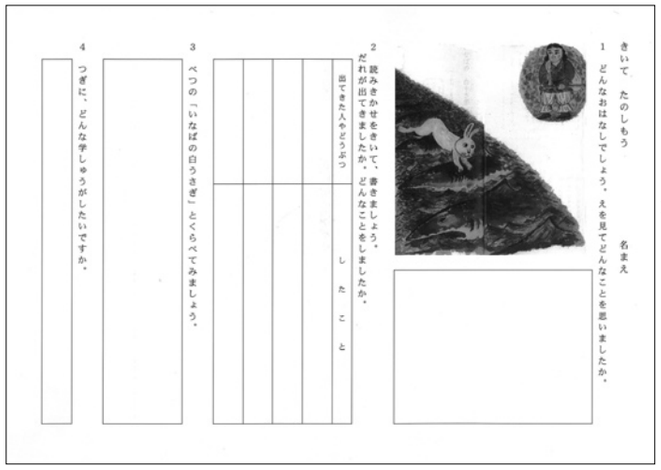
①朝読書の時間に読書活動を広げる。

「本はともだち」や教師作成のブックリスト（資料2）を参考にする。神話は一人で読むには難しい表現もあると思われるので、「読みあい」（※2）活動を取り入れるとよい。

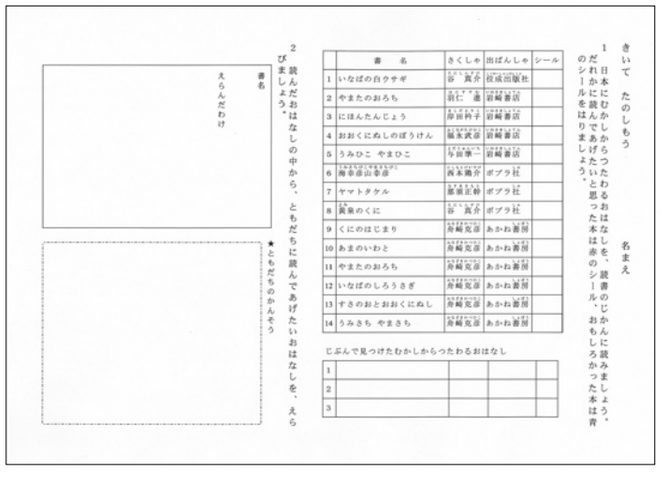
②友達に読み聞かせたい本を選び、読み聞かせを行う。

一時間を前後半に分け、ワークショップ形式で行う方法もある。その本を選んだ理由も明らかにし、聞き手から感想をもらうようにする。

短時間の学習ではあるが、自分一人ではなかなか手にしないような神話というジャンルの読書を、「読み聞かせ」によって広げることができるのではないかと思う。



資料1〈ワークシートの例〉



資料2〈ブックリストの例〉

※1 国語デジタル教科書
教科書を拡大投影することで、全員で同じ画面に注目しながら学習できる指導用ソフトウェア。

※2 読みあい
一対一で、一人が絵本を声に出して読み、相手がそれを聞くというもの。児童文学作家の村中李衣氏が提唱している。

神話は人間らしく生きる根っこ

―今回の改訂で、二年上巻に「いなばの白うさぎ」を書き下ろしていただきましたが、以前から興味のあったお話だとうかがいました。

この神話は、幼いころから知っていますし、昔は『大黒様』というこの話を題材とした歌もよく歌っていましたから、親しみのある話です。そして、現代のあわただしい社会の中で暮らしていると、神話や民話、昔話は、人々が素朴に幸せに人間らしく生きる根っこだと感じるようになりました。ですから、ぜひ教科書に載せたいと思っていたのです。

しかし、いざ、現代の小学二年生に向けて書くとなると大変でしたね。

―どんなご苦労がありましたか。

まず、原典の『古事記』をそのまま訳したのでは、人名や話の背景など複雑で難しくなってしまいます。そこをわかりよく表現するために、書きだしと結びにいちばん苦労しました。書きだしでは、「むかし、むかし、大むかし」「八十人ものかみさまの兄弟」などと表現することで昔話とは違ったもっともっと昔のこと、神話ならではの感じを出したつもりです。結びも、原典にそって、ここまででひとまず完結した話になるようにしました。

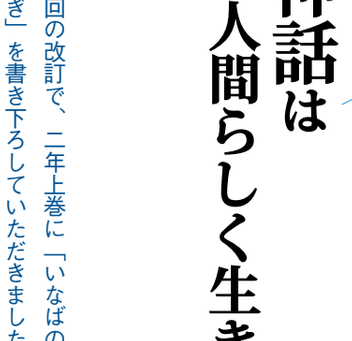
また、先生の朗読を前提とした教材化という点でも工夫しています。わたし自身も経験がありますので、聞き手の子どもたちが、次に何が起きるのかわくわくしながらお話を聞く様子を知っています。そんな子どもたちをしっかりひきつけるように、場面の展開をはっきりと表し、情景が子どもたちの目に浮かぶように簡潔な表現を心がけ、一文をあまり長くせずテンポよく話が展開するようにしました。

―授業の中では、どのように読み聞かせをしてもらいたいですか。

大げさな演劇調にするとか、いろいろな解釈を入れるとかせずに、このままの文章を、先生のいつもの声、いつもの調子で読んでいただければそれで十分だと思っています。

わたしが小学校のころ、体育が雨で中止になると必ず先生に本を読んでいただきました。どんな本だったかはほとんど記憶にありませんが、そのときのうれしさは今でも忘れられません。

今の子どもだって、本を読んでもらうことや先生との交流が嫌いなはずはないと思います。できるだけ時間を作って子どもたちに本を読んであげてください。



中川李枝子（なかがわりえこ）

児童文学作家。北海道生まれ。光村図書 国語教科書の「はる」「いちねんせいのうた」（一上）、「くじらぐも」（一下）、「いなばの白うさぎ」（二上）の作者。『いやいやえん』『ぐりとぐら』シリーズ（以上、福音館書店）など多数の作品で親しまれている。

読み聞かせの場は、共に読むことを楽しむ場

―「読み聞かせ」が教科書に位置づくことで、どんな効果が期待できるでしょうか。

読み聞かせは、子どもにとっては「耳からの読書」といってよいでしょう。この経験を小さいころから積み重ねることは、まず、読書に対する肯定的で能動的な態度を養うのにとても役立ちます。また、普通の会話のような「話し言葉」ではなく、「書き言葉」の文体へのなじみを深めることにもつながります。つまり、将来の自律的な読書習慣への大事な資本蓄積になるといってもよいでしょうね。また、大人になってもオーディオブックを聞いて楽しむことがあるように、読書への入門であると同時に生涯続く読書の方法といってもよいでしょう。そういった意味で、教科書教材として全学年に位置づけられたのは画期的なことです。

今回の教科書改訂では、各学年の「読書案内」も充実させました。「読んでもらって聞く」というと、一見、受け身の活動で、読書とは正反対のように感じられますが、子どもが自分から頼んで読んでもらおうとする場合には、きわめて能動的な読書体験となります。読み聞かせ教材を入り口として、さらに先に広がる豊かな本の世界への道筋もしっかりとつけられているのです。

―読み聞かせをするうえで、気をつけなければならないことはどんなことでしょう。

最初は教師の側から働きかけながらの読み聞かせでいいのですが、子どもが「先生、これ読んで」と言ってくるような雰囲気を作ることも大切です。

そのためには、聞いた後に必ず感想を求めたり、話の内容について質問したりすることはできるだけしない。聞き手の心を自由に、楽にして作品の世界に没頭させてください。

それから、できるだけ多種多彩な本を読んであげることも必要です。教材として取り上げられている昔話や民話のおおらかで楽しい世界は入門として最適です。が、それぞれの子どもによって好きなジャンルは違いますから、物語に限らず、科学的な読み物でもいいですし、学年によっては新聞記事でもかまいません。

また、朝の会、昼休み、放課後など、機会もできるだけ多く設けてやることが大事です。その中で、「先生、これ読んで」という要求が出てきたら、不公平にならないよう配慮しながら、読んであげてください。

「読み聞かせ」の場は、声と耳を通して読書を共有したり、交流したりして楽しむ場です。先生が「読み聞かせ」をするだけでなく、子どもが「読み聞かせ」をする場を工夫してもよいですね。



首藤久義（しゅとうひさよし）

千葉大学教授。旧満州に生まれ、大分県別府市で育つ。秋田大学、文教大学を経て、現職。日本国語教育学会常任理事。主な著書に『書くことの学習支援』、『生活漢字の学習支援』（以上、東洋館出版社）など。